

叙事詩の宗教哲学

— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (VIII) —

茂木 秀 淳

〈Mokṣadharmā 和訳〉¹

[194章]² (=D. 201章, 7365-7393)

ユディシュティラは言った。

- (1) 知識の実修 (jñānayoga) の果報は何か。ヴェーダのそして制戒 (niyama) の果報は何か。また³どのようにして生き物の本体⁴は認識されるのか。祖父よ、それを私に語るべし。

ビーシュマは言った。

- (2) ここでも人々はこの古譚を例として語る。造物主 (ブラジャーパティ) たるマヌと偉大な聖仙ブリハスパティの対話を。

- (3) 神仙の群れの中ですぐれた偉大な聖仙ブリハスパティは、弟子として師に敬礼して、地上で⁵最もすぐれた者である造物主 (マヌ) に次のような以前からの疑問を尋ねた⁶。

- (4) (世界の) 原因⁷, 通用しているマントラの規定⁸, 賢者たちが語る知識における果報、マントラの言葉によって明らかにならないもの、それを汝は私にありのままに語るべし。

- (5) 処世の書・聖典・マントラを知る人々によって⁹得られる果報、すぐれた牛を布施する¹⁰種々の祭式によって得られる果報、偉大な人々によって崇拝される果報、それは何であり、どのように生じ、またどこに生じるのか。

- (6) 大地・大地から生じた者・風・中空・水に住む者・水・天空、そして¹¹天空に住む者はどこから (yataḥ) 生じたのか、その古譚を私に語るべし。

1 本稿は『叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (VII) —』(「密教研究」第194号, 1995年11月) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿より用いる略号は次のものである。

Frauwallner [1953]: Frauwallner, Geschichte der indischen Philosophie, 1.Band, 1953, Wien.

2 本稿の対象である194章から199章までのマヌとブリハスパティの対話の内容は, Frauwallner [1953], pp. 103-112 に紹介されている。

3 P. vā D. ca

4 P. bhūtāmā vā D. bhūtāmā ca N. bhūtāmā jivaḥ cf. MBh. XII. 187.6

5 P. pṛthivyāṃ D. prajānāṃ

6 MBh. XII. 194.3-24, 195.2-196.4, 及び 199.26-32 は triṣṭubh である。

7 yat kāraṇaṃ N. kāraṇam jagata iti śeṣaḥ

8 P. mantravidhiḥ pravṛtto D. yatra vidhiḥ pravṛtto

9 P. yad arthaśāstrāgamamantravidbhir D. yac cārthaśāstrāgamamantravidbhir

10 P. varagopradānaiḥ D. atha gopradānaiḥ

11 P. caiva D. cāpi

- (7) 人 (nara) は知識を求めるが故に、知識を目的とする活動が生じる。そして私はすぐれた古譚を知らない。私はどうしても誤った行為をするであろう (kathaṃ nū kuryām)。
- (8) 私は、賛歌と旋律の集成・韻律・星の運行・語義解釈、そして祭式とともに文法学・音声学を学んだが、存在物の根元 (bhūtaprakṛti) を知らない。
- (9) 汝は、知識におけるあるいは祭式における果報、その一切を私に語るべし¹²。そして、靈魂 (śaririn) はどのように体から出て、どのようにして再び (他の) 身体に入っていくのか (を語るべし)。

マヌは言った。

- (10) ある人にとって善きことは何でも快樂であると言われている。人々は、それこそが苦であり、望まぬものであると語る¹³。「私には望ましきことがあるべし。他のことはあってはならない」と考えた時に、祭式行為の規定 (karmavidhi) が生じ、「望ましいことも望ましくないことも私に来るべからず」と考える時、知識の規定 (jñānavidhi) が生じるのである。
- (11) ヴェーダにおける (chandasi) 祭式行為の実修 (karmayogāḥ) は願望 (kāma) を本質としている。それ (祭式の実修) から解放された人は最高者に達するであろう。種々の祭式の道において快樂を求めて振る舞う人は最高者に至ることはない¹⁴。なぜならその最高者は、祭式の道から離れた願望なき最高のブラフマンであり、望みに従わぬ者であるから¹⁵。
- (12) 生き物は心 (manas) と祭式 (karman) とによって (輪廻の中に) 生まれるのである。この二つは世間に好まれたる真実の道である¹⁶。祭式は永遠でありまた限界があると¹⁷観察すれば¹⁸、心の棄却が (最高者に至る) 原因である。他の原因は存在しない。
- (13) 本性が暗闇に覆われていた¹⁹日は、夜が明ければ、それ自体として「導く者」である

12 第9詩節の前に D. は

sa me bhavān śansatu sarvam etat sāmānyaśabdaiś ca viśeṣaṇaiś ca /
を挿入し、P. 9ab と合わせて、第9詩節としている。そして P. 9cd 「靈魂が...」は P. 10ab と共に第10詩節として扱われている。従って、以下 P. と D. は詩節番号が1つずつずれる。

13 Deussen: Alles, was einem lieb ist, das nennt man Lust, und Schmerz wird das Unerwünschte bennant; Aramaki: They pronounce that any and everything pleasant for them is happiness and that any and everything unpleasant [for them] suffering. (Aramaki, p. 113)

14 P. na paraṃ prayāti D. nirayaṃ prayāti この後に D. は以下の詩節を挿入している。

bṛhaspatir uvāca
iṣṭaṃ tv aniṣṭaṃ ca sukhāsukhe ca śāśis tv avacchandati karmabhiś ca /
manur uvāca
ebhir vimuktaḥ param āviveśa etatkṛte karmavidhiḥ pravṛttaḥ / (=10cd)
kāmātmakāṃś chandati karmayoga ebhir vimuktaḥ param ādadita / (11ab)
ātmādibhiḥ karmabhir adhyamāno dharme pravṛtto dyutimān sukhārthi /

15 P. hy avāśyam D. hy avaiti

16 P. dvāv apy etau satpathau D. dvāv evaitau satpathau N. satpathau brahmaprāptimārgau

17 śāśvataṃ cāntavac ca N. śāśvataṃ ca mokṣahetur api antavac ca kṣudraphalam api

18 P. dīṣṭvā D. dīṣṭaṃ

19 P. tamasā saṃvṛtātmā D. tamasāsaṃvṛtātmā (?) N. tamasā 'saṃvṛtātmā 'nāvṛtasvarūpaḥ sa

のと同様に、知識は、認識の特性と²⁰と結びついて、祭式を不浄にして避けるべきものと見るのである。

- (14) 人々は、蛇・尖った草の先端 (kuśāgra)・井戸を認識すれば、(それらを)迂回して避ける。しかし愚かな人々は²¹それらを認識しない故に、そこに落ちるのである。知識における果報をそのようにすぐれたものと見るべし。
- (15) 規定通りに用いられた全マントラ・述べられた通りの犠牲 (yajña), そして²²贈り物・食物の施与・心の集中、祭式の果報は(これら)五種を本質とすると、人々は語る。
- (16) もろもろのヴェーダは、祭式は(祭る者の)特性を本質とする²³, と語っている。それ故、マントラも²⁴(祭る者の特性を本質としている)。なぜならば、マントラの根本は祭式であるから。教令 (vidhi) は遂行されるべき(祭式)である²⁵。(遂行された教令の)果報は(祭る者の)心によって生起するが (manasopapattiḥ), しかし²⁶(果報を)享受する者は個我(靈魂 śarīrin)である。
- (17) 良い音声・色形・そして味・また清浄な触感と香りも(果報である)。人は死に至る前に²⁷(これらの)主となるであろう。このように(人は)果報を行為の世界において (karmaloke) 獲得するのである。
- (18) 身体によって為された行為はすべて、身体と結びついた者(個我、靈魂)がそれを享受するのである。身体は快樂の拠り所であり、苦の拠り所も身体である。
- (19) 少しでも言葉によって行為が為されれば、そのすべてを(個我は)言葉によって享受するのである。少しでも心 (manas) が行為を為したならば、心にいるこの者が (manaḥstha evāyam) それを享受するのである。
- (20) 行為の果報を意図する者は、果報を求めて、(自らの)特性に従い行為における特性を²⁸実行するが、それ(行為)に従って、(その行為の)特性と結びついて、浄不浄という行為の果報を享受するのである。
- (21) 魚が流れに従うように、(人は)以前為された行為に従う。すぐれた個我は (paramaḥ śarīri) 善き行為に満足するが、しかし悪しく為された行為には満足しないのである。
- (22) それからこの世の一切が生まれたもの、それを知って、氣力ある者たちは²⁹(世間を

20 vijñānaguṇena N. vijñānaṃ buddhir vijñānaguṇena vivekena

21 P. mūḍhā D. kecij

22 P. tv atha D. tv iha

23 guṇātmakaṃ karma N. kartṛsvabhāvabhedāt karmaṇāṃ phalabhedam āha guṇeti / guṇātmakaṃ sāttvikam rājasam tāmasam ca vidheyam karmety arthaḥ

24 P. mantrā D. mantrō

25 vidhir vidheyam N. evaṃ vidhir api trividhaḥ ātmakāmo yajeta / svargakāmo yajeta / abhicaran yajetyādi /

26 P. tu yathā D. tu tathā

27 nasamsthānagataḥ N. nasamsthānagata ity ekaṃ padaṃ maraṇam aprāpto jivann eva syāt

28 P. yathāguṇam karmaguṇam D. yathā yathākarmaguṇam N. (karmaguṇam) karmaṇi guṇaḥ sattvaṃ rajas tamo vā karmaguṇas tam

29 ātmavanto N. ātmavanto jitacittā

超えて)そこに至るのである。マントラの言葉によっては明きらかにされなかったもの、最高者であるものを私は(これから)語るであろう。聞け。

- (23) 種々の味を離れ³⁰, また種々の香りを離れ, 音声なく, 触感なく, 形をもつことなく, (感官によって) 把捉されず, 顕現せず, 色なき (avarṇam) 唯一なる者が, 生き物のために五種類を³¹創造したのである。
- (24) それは, 女ではなく, 男ではなく³², 双なりでもない, そして存在することもなく, 存在しないこともない, また存在しかつ存在しないということもない。ブラフマンを知る人々が見るそれを不滅 (akṣara) にして滅することはないと知るべし。

[195章] (=D. 202章, 7394-7416)

マヌは言った。

- (1) その不滅のもの³³から虚空, そこから風, 風から火³⁴, そこから水, 水から地が生じ, 地において世界が生じたのである。
- (2) この世界のものは (ime) 身体と共に³⁵水に行き, 水から火となり, 風, 虚空となる。(不滅のもの)の状態をもたぬ者は³⁶は虚空から戻るが, その状態をもつ者は³⁷最高者に達するのである。
- (3) かの最高者は, 熱くもなく, 冷たくもなく, 柔らかくもなく, 鋭くもなく, 酸っぱくもなく, 渋くもなく (kaṣāyam), 甘くもなく, 苦くもなく, 声ももたず, 香りももたず, 形もなく, 自性もないのである。
- (4) 身体は触感を知る。そして³⁸舌は味を, 鼻は香りを, 二つの耳は³⁹音を, 目は色形を知る。しかし大我を知らない人々は (anadhyaत्मavido manuṣyāḥ) かの最高者を捉えることはない。
- (5) 味から舌を⁴⁰引き返させて, 香りから鼻を, 音から両耳を⁴¹, 触感から身体を⁴², 色の特質 (rūpaṅga) から目を引き返させて, その後で (人は) 自ら自性を最高者と見る

30 P. viyuktaṃ D. vimuktaṃ

31 P. pañcaprakāraṃ D. pañcaprakārān

32 P. pumān vāpi D. pumān nāpi

33 akṣarāt Deussen: Aus dem Unvergänglichlichen Aramaki: From the [fundamental philosophical truth represented by] Imperishable Syllable OM (Aramaki, p. 118)

34 P. vāyor jyotis D. tato jyotis

35 P. ime śarīrair D. etaiḥ śarīrair N. (etair) pārthivaiḥ śarīrair lavaṇodakanyāyena śarīriṇaḥ

36 nabhāvinas N. bhāvino bhāvo 'kṣaraṃ tad yeṣām ātmatvenāsti te Deussen: jene, welche das [wahre] Wesen besitzen,

37 P. ye bhāvinas te D. mokṣaṃ ca te vai

38 P. tu D. ca

39 P. śravaṇe D. śravaṇau

40 P. rasanāṃ D. rasanām

41 P. śravaṇe D. śravaṇau

42 P. tanuṃ D. tvacaṃ

- のである⁴³。
- (6) 人が、それに基づいて捉えて行為し、そこにおいて活動を開始するもの、またある人が、そこにおいて、それによって行為者となるもの、それが原因 (kāraṇa) であり、それは集合 (?samupāya) であると言われている⁴⁴。
- (7) 卓越したもの、達成させるもの、遍満するもの⁴⁵、世の中でマントラのように称賛されるもの⁴⁶、一切の原因であり (sarvāhetuḥ)、最高の目的を行うもの⁴⁷、それが原因 (kāraṇa) である。結果はそれとは別のものである。
- (8) ある人が自らの行為によって⁴⁸矛盾なく善悪 (の結果) を得るように⁴⁹、この知識は⁵⁰、自らの行為によって生じたものによって、善悪の (行為の結果である) 身体の中に束縛されるのである。
- (9) 先端で (puratas) 灯された灯火は燃えながら他の物の照明を為すように、そのように五感という松明は、知識によって輝くが、他に依存する者である⁵¹。
- (10) 王にとって多くの宰相たちが適切に各々の手段を語るように⁵²、そのように身体には五種 (の感官) が存在している。知識を部分としてもつ者は⁵³それら (感官) よりも上位である。
- (11) 火の輝き、風の勢力⁵⁴、太陽の光線、川の水が、広がっては(?)⁵⁵去り、また来るように、そのように個我 (靈魂 śarīrin) にとって身体が (去来するのである)。
- (12) ある人が斧を用いても⁵⁶、煙も火も木の中に見ることはないのと同様に、身体の腹と手足を切り裂いても、それとは別のものを見ることはない。
- (13) その同じ木々をこすると、(木と木の) 結合から煙と火を見るのと同様に、賢明な⁵⁷

43 tataḥ paraṃ paśyati N. tato nirvartakāt pramātuḥ paraṃ tadupādhibhūtabuddhyādeḥ paraṃ svaṃ pratyagabhinnaṃ svabhāvaṃ svarūpasattāṃ paśyati

訳文は、最高者と自性に関して、第三詩節の内容と矛盾している。tataḥ paraṃ全体で「その後で」と解せば、その場合には、「その後で (人は) 自らの自性を見る」という意味となるが、最高者と自性の関係が明確になるわけではない。

44 P. tat kāraṇaṃ taṃ samupāyam āhuḥ D. yat kāraṇaṃ te samudāyam āhuḥ

45 P. yac cābhibhūḥ sādhaṃ vyāpakaṃ ca D. yad vāpy abhūd vyāpakaṃ sādhaṃ ca

46 P. mantravac chansate caiva loke D. mantravat sthāsyati cāpi loke

47 P. paramārthakāri D. paramātmakāri

48 sukṛtair N. sukṛtaiḥ samyaganuṣṭhitaḥ puṇyapāpaiḥ Deussen: durch seine eigenen [lies sva] Werke sukṛtaiḥをsvakṛtaiḥと読んでいる伝承もある。

49 P. yahtā ca D. yathā hi

50 idam jñānam N. idam ajaḍaṃ svabhāvākhyam paramakāraṇaṃ jñānaṃ nityajñaptimātram Deussen: die Wissenschaft [von dem Höchsten]

51 paravanta eva N. paravantaś citprakāśādhinatayā prakāśakṛtaḥ na svata ity arthaḥ

52 P. yathā hi D. yathā ca

53 P. jñānaikadesāḥ D. jñānaikadesāḥ D. に従えば、「知識を部分としてもつ者」は感官ということになる。

54 P. vegā D. vego

55 P. tanyamānās D. saṃcaranty atas

56 gṛhītvā N. gṛhītvā vyāpārayitvā

57 P. subuddhiḥ D. sabuddhiḥ

- 目覚めたる者は、また同時に感官をもつ者であるから(?)⁵⁸、自ら⁵⁹自性を最高者と見るのである。
- (14) (人は)夢の中で自分の身体が⁶⁰地面に落ちるが、(それは)自分とは別であるのを見るのと同じ様に、耳などと結びつき、よい心もち、よい理性をもつ者(靈魂)は⁶¹、(死後)ある身体から⁶²別の身体へと赴くのである。(cf. Johnston, p. 46)
- (15) この最高の個我は (paramaḥ śarīri) 誕生・成長・衰退・死と結びつくことはない。この不可見の者は、再生と結びつくことによって⁶³、この身体を通して別の身体に行くのである。
- (16) 誰も目でアートマンの色形を見ることはない。また何らかの(アートマンとの)接触到達する事もない。また⁶⁴(アートマンは)それら(感官)を用いて為すべきことを遂行することもない。それらはアートマンを見ることはないが、アートマンはそれらを見るのである。
- (17) (人は)灯火において⁶⁵輝いている火の、熱より生じた何らかの⁶⁶色形を見るが、色形の内部の⁶⁷性質 (guṇa) を理解することはない。その(アートマンの)色形もそれ(火)と同様であると観察される⁶⁸。
- (18) そのように⁶⁹人は (manuṣyaḥ) 身体を解放した後、目に見えない別の身体に入るのである。(すなわち)大元素の中に身体を解き放った後、それ(大元素)を抛り所とする⁷⁰色形をもつのである。
- (19) (死後)個我 (śarīrin) はあまねく虚空・風・火・水そして地に入る。それぞれ(の元素)を抛り所とする耳など(の感官)は、(前世の)行為と結びついて存在し⁷¹、(個我の入った元素の)五種の性質 (guṇa) に依存する。
- (20) 耳は虚空に基づき、鼻は地に基づき、色そして熱変 (vipāka) は火に基づいている。汗と味は水を抛り所とすると言われ⁷²、接触によって作られる性質 (guṇa) は風を本質としている。

58 P. samam indriyatvād budhaḥ D. samam indriyātmā buddhiḥ

59 P. svaṃ D. taṃ

60 aṅgaṃ N. aṅgaṃ śarīram

61 P. sumanāḥ subuddhir D. samanāḥ sabuddhir

62 liṅgāt N. liṅgāt sthūladehāt

63 P. pratisandhiyogāt D. phalasanniyogāt あるいは「(再生をもたらす)欲望と結びついて」か。

64 P. 'tha D. tu

65 P. pradīpe D. samīpe

66 P. kiṃcit D. kaścit

67 P. cāntaraṃ D. cāparaṃ

68 P. dṛśyate D. dṛśyati

69 P. yathā D. tathā

70 tadāśrayaṃ N. tadāśrayaṃ dehāntarāśrayam Deussen: auf jenen [den grossen Elementen] beruhende Erscheinungsform

71 nānāśrayāḥ karmasu vartamānāḥ N. nānāśrayāḥ svasvopādānagāḥ santo 'pi karmasupūrva-prajñāśahiteṣu vartamānāḥ śliṣṭāḥ Deussen: mit ihrer betreffenden Aufgabe sich befassend,

72 P. jalāśrayaḥ sveda ukto rasaś ca D. jalāśrayaṃ teja uktam rasaṃ ca

- (21) 五種（の感官）は大元素の中に住し、五種の感官の対象は感官の中に（住す）。これらすべては思惟器官（manas）に随順する。思惟器官は理性（buddhi）に従い、思惟器官は自性に（従うのである⁷³）。
- (22) 善悪の行為が為されるとそれはその人の⁷⁴自らの身体に戻って来る。水に住むものが流れに従うように、善きあるいは悪しき（行為）はマナスに従うのである。
- (23) （動かぬものでも）動けば目の道に入るように、また微細なものは（レンズを用いれば）大きな姿のように見える⁷⁵ように、また（鏡において）自分の姿を姿として見るように⁷⁶、このように（不動、微細にして見者である）最高者は理性の道に入って来るのである（＝認識可能となるのである）。

[196章] (=D. 203章, 7417-7439)

マヌは言った。

- (1) かつて感官によって補助され⁷⁷獲得したもろもろの性質（guṇa）を、その後その同じ感官が損なわれても長く記憶しているもの、それが理性の姿をした最高の自性（paramaḥ svabhāvaḥ）である。
- (2) （人は）感官の対象を同時に全体的に見ることはない⁷⁸。また異なる時間に⁷⁹起こることを完全に⁸⁰見ることもない。能力に従って⁸¹、彼は知識をもつ者として（この世で）行動する。それ故、彼は単一なる最高の個我（paramaḥ śarīri）である⁸²。
- (3) それ（個我）はラジャスとタマスそして第三番目としてサットヴァというさまざまな知識の性質⁸³に至る。個我は、薪にある火に入る風のように⁸⁴、もろもろの感官に入るのである。
- (4) 人は目によってアートマンの姿を見ることはない。触感は感官の感官（アートマン（?））を⁸⁵見ることはない。耳の特徴（liṅga）を聴覚に示すことはできない⁸⁶。（感官

73 P. manaḥ svabhāvam D. matih svabhāvam N. mano buddhim anveti buddhiḥ svabhāvam anveti
P. では buddhi と svabhāva の関係が明らかでない。

74 P. yad asya D. yad anyat

75 P. abhipāti D. abhibhāti

76 svarūpam ālocayate ca rūpam N. tad evaṃ kūṣasthasyātmano vikāritve sūkṣmasya sthūlatve dṛ grūpasya dṛśyatve ca krameṇa dṛṣṭāntatrayam

77 P. tūpakṛtān D. tūpahitaṃ

78 P. nāvekṣate D. nopekṣate

79 atulyakālam N. atulyakālam anekakālam

80 kṛtsnam N. atitānāgatam padārthajātam kṛtsnam iha paratra vā janmani dṛṣṭam

81 P. yathābalaṃ D. tathācalaṃ

82 部分的認識を全体的なものにする継続的に存在する単一の者がなければならぬ、ということか。

83 P. jñānaguṇān virūpān D. sthānaguṇān virūpān

84 hutāśanaṃ vāyur ivendhanastham N. yathā kāṣṭhastho 'gnir eva kāṣṭham dahati na vāyuh sa tv agniṃ dipayatya eva evam indriyasthā dhirendriyajaṃ sukhādikaṃ bhuṅkte citis tu buddhiṃ cetayata eva na tu tadyaṃ sukhādikaṃ bhuṅkte ity arthaḥ

85 indriyendriyam N. atra hetuḥ yata indriyendriyaṃ 'prāṇasya prāṇam uta cakṣuṣaś cakṣuḥ śrotasya śrotam manaso ye mano viduḥ' iti śruter indriyaprakāśakaṃ nendriyaprakāśyatvaṃ yātity arthaḥ Deussen: ein Sinn nach andern [schaut ihn (Ātman) nicht],

86 P. na śrotaliṅgaṃ śravaṇe nidarśanaṃ D. na śrotaliṅgaṃ śravaṇena darśanaṃ

- は対象を) やって来た通りに⁸⁷見るが, それ(感官)は(見た後に)滅するのである(?)⁸⁸。
- (5) 聴覚などはそれぞれ自分で自分を見ることはない。一切を知り (sarvajñaḥ), 一切を見る知田者が⁸⁹それら(感官)を見るのである。
- (6) ヒマラヤ山の反対側や月の裏側のように, 人々によって未だ見られたことのないものは, それ故それは存在しない, ということはない。(cf. Frauwallner [1953], p.103.23-29)
- (7) それと同様に, 微細にして知識の本性をもつ生き物の本体 (bhūtātman) は, これまで目によって見られたことはないが, それ故それは存在しない, ということはない。(cf. Frauwallner [1953], p. 103.23-29)
- (8) 世間の人々は月の表面に目印 (lakṣma) を見えても, それを認識しない。それと同様に(アトマンは)存在していても(認識され)ないのである(?)⁹⁰。このようにそれは⁹¹最後の拠り所ではないということはない⁹²。
- (9) 太陽の道に通じている知者達は, 日の出(の前)と日の入り(の後)⁹³, (太陽の)姿がない状態から姿をもつ太陽を英知によって見るのである。
- (10) このように賢明な人々は, 理性という灯火によって, 遠くにあるものを近いものに, 認識されるべきものを知識と結びつけたものにすることを望むのである。
- (11) 例えば漁師たちが網で魚を捕まえる⁹⁴ように, 手段がなければいかなる目的も成就されない。
- (12) 鹿によって鹿を, 鳥によって鳥を, 象によって象を捕獲するように, そのように⁹⁵認識されるべきものは知識によって捉えられるのである。
- (13) 「蛇のみが蛇の足跡を見る」という教えがある⁹⁶。同様に, (人は)身体において⁹⁷身体に存在する⁹⁸認識されるべきものを知識によって見るのである。
- (14) 感官は感官によって知ることはできないように, この世界で最高の理性は理性によって⁹⁹最高者を見ることはない。
- (15) 月は新月の夜には目印がないので見えないが, 消滅したのではない。個我 (saririn) もこのように知るべし。(cf. Frauwallner [1953], p. 103.31-34)

87 P. tathāgataṃ D. tathākṛtaṃ

88 tad vīnaśyati Deussen: das Organ aber fällt dahin [wird als nichtig erkannt].

89 P. kṣetrajñaḥ D. sarvajñaḥ (D. は sarvajña の語をこの詩節の c 句と d 句に 2 度用いている。) N. punaḥ sarvajña itī dṛśyadras̥tor nityasambandhaś cōktaṃ ity apunaruktyam

90 P. evam asti na vety etan D. evam asti na cōtpannaṃ

91 tan N. tad ātmavedanaṃ

92 na ca tan na parāyaṇam Arjunamīśra: na ca tan na parāyaṇam itī / sa eva yogināṃ paramā gatīḥ

93 P. udayāstamaye D. udayāstamane

94 P. badhnanti D. badhnati (?misprint)

95 P. evaṃ D. eva

96 P. (itī) nidarśanam D. (itī) hi naḥ śrutam

97 mūr̥tiṣu N. mūr̥tiṣu sthūladeheṣu

98 mūr̥tisthaṃ N. mūr̥tisthaṃ liṅgadehasthaṃ

99 P. buddhyā D. bodhyaṃ

- (16) 新月の夜、月は住まいをなくしたので輝かないのである。そのように身体を離れた個我は、存在していても¹⁰⁰知覚されないのである。(cf. Frauwallner [1953], pp. 103.34-104.1)
- (17) 月が他の住まいを¹⁰¹得て再び輝くように、個我は他の身体を (liṅgāntaram) 獲得して再び輝くのである。(cf. Frauwallner [1953], p. 104.1-4)
- (18) この(月の)誕生・成長・衰退は¹⁰²明らかに (pratyakṣeṇa) 知覚される。月にはこのような顕われがあるが¹⁰³、個我にはない。
- (19) 誕生・成長・衰退から¹⁰⁴月はそのようなあり方であると捉えられる。月は、新月の夜においても同様に身体をもって (mūrtimān) 存在しているのである。
- (20) 暗闇は月に近づいても¹⁰⁵月を離れても知覚されない。個我也同様に、(身体を)解放しあるいは(身体に)近づくものと見るべし。
- (21) 暗闇は月の光と結びついた時それと知覚されるように、(個我は)身体と結びついた時、個我と認識されるのである。
- (22) 月の光から離れた彼のラーフは知覚されないのと同様に、身体から離れた個我は認識されないのである。
- (23) 新月の夜、月は消えても (gataḥ) もろもろの星と結びついているように、(個我は)身体を離れても行為のもろもろの果報と結びついているのである。

[197章] (=D. 204章, 7440-7459)

マヌは言った。

- (1) 眠っている時、この身体は (vyaktam) 横たわっているが、心 (cetanam) すなわち知識は感官を伴って歩き回る。(cf. Bṛh.Upa.4.3.13,16) それと同様に、死後(心は)存在と非存在を¹⁰⁶(歩き回るのである)。
- (2) 人は澄んでいる水の中に目で(自分の)姿を見るように、澄んだ感官をもつ者は¹⁰⁷知らるべきものを知識によって見るのである。(cf. Frauwallner [1953], p. 105.2-5)
- (3) 人は動揺している水の中に(自分の)姿を見ることはないように、感官が混乱した状態では、(人は)知られるべきものを知識において見ることはない。(cf. Frauwallner [1953], p. 105.5-9)
- (4) 無知は¹⁰⁸知識なきこと (ajñāna) によって作られる。無知によってマナスは損なわ

100 P. mūrtiviyuktaḥ sañ D. mūrtivimukto 'sau

101 P. kośāntaram D. ākāśāntaram

102 P. janmavṛddhikṣayaś D. janmavṛddhiḥ kṣayaś

103 P. candramaso vyaktir D. cāndramasī vṛttir

104 P. utpattivṛddhivyayato D. utpattivṛddhivayasā

105 P. nābhisarpad D. nopasarpad

106 bhavābhavau N. bhavaḥ saṃsāras abhavo mokṣa(ḥ)

107 P. prasannendriyavāñ D. prasannendriyatvāj

108 abuddhir N. abuddhir avidyā

- れる¹⁰⁹。マナスが損なわれると、マナスに属する五種(=感官)がすべて損なわれる。
- (5) 知識なきことに満足し、対象に没入するものは(解脱した者とは)見られない(?)¹¹⁰。(対象を?) 見ることなく、清められた自己をもつ者は¹¹¹もろもろの対象から引き返すのである¹¹²。
- (6) 人(puruṣa)は、罪の故に(kalmsāt)この世では渴望(tarṣa)を断ち切ることはできない。罪が(pāpam)終わりに至れば¹¹³渴望は停止する。(cf. Frauwallner [1953], p. 111.25)
- (7) (人は)もろもろの対象に¹¹⁴執着する故に、そして永遠なものを抛り所としない故に¹¹⁵、マナスによって他のものを望み、最高者に至らないのである。(cf. MBh. XII. 199. 21)
- (8) 悪しき行為の消滅によって人々には知識が生じる。すると(人は)鏡の面の輝きの中で¹¹⁶、自己において自己を見るのである。
- (9) (人は)広がった感官によって苦をもち、その同じ感官が制御と快樂をもつ。従って、もろもろの感官の姿から自己を自己によって制御すべし。
- (10) 感官よりもマナスが先であり、それより理性が上位である。知識は理性よりも高く、最高者は¹¹⁷知識よりも上位である。
- (11) 未展開のものから(avyaktāt)知識が生じ、それから理性が生じ、それからマナスが生じる。(cf. Katha-Upa. 3.10-11) マナスは耳などと結びついて音声などを正しく見るのである。
- (12) その音声などを棄却する者、そしてまたすべての開展したものを(vyaktayas)(棄却する者)、形相の群れを放棄する¹¹⁸者は、それらを放棄した後、不死を得るのである。
- (13) 太陽は、上る時に光の輪を発散し、沈む時には¹¹⁹それを自分の中に収める。それと同様に、(cf. Frauwallner [1953], p. 104.10-13)
- (14) 内的自我は(antarātmā), 身体に入って、感官の光線によって五種の感官の性質を獲得し、(それから)引き返して自らの姿に至るのである¹²⁰。
- (15) 行為によって導かれる道を何度も繰り返して¹²¹進みつつ、気力ある者は(ātmavān)

109 P. abuddhyā duṣyate D. abuddhyākṛpyate

110 P. na dṛśyate D. na tṛpyate Arjunamiśra: na dṛśyate kaivalyena

111 P. adṛṣṭvaiva tu pūtātmā D. adṛṣṭavac ca bhūtātmā N. adṛṣṭavat dharmādharmayuktaṃ yathā syāt tathā P.の adṛṣṭvā の意味がはっきりしない。

112 viṣayebhyo nivartate N. viṣayebhyaḥ śabdādibhyo bhogārthaṃ nivartate mṛtaḥ punar jāyate pūtātmā と読む P. と bhūtātmā を注釈している N. では意味が反対になる。

113 P. tathā tarṣaḥ pāpam antaṃ gataṃ yathā D. tadā tarṣaṃ pāpam antagataṃ yadā

114 P. viṣayeṣu ca D. viṣayeṣu tu

115 P. namaṣṣrayāt D. tu maṣṣrayāt

116 P. athādarśatalaprakhye D. yathādarśatale prakhye

117 P. param D. mahat

118 P. vimuñcaty ākṛtigrāmāṃs D. vimuñcet prakṛtān grāmāṃs

119 P. evāstam upāgacchaṃs D. evāstam apāgacchaṃs

120 astam āvṛtya gacchati N. āvṛtya astam svarūpaṃ gacchati

121 punaḥ punaḥ N. punaḥ punar dehāvāptau

行為の果報たる増大した¹²²ダルマを獲得するのである。

- (16) (対象を) 享受することのない個我 (dehin) にとって、もろもろの対象は消滅する。これ (個我) にとっては、味も¹²³最高者を味を離れた者と見ると消滅する。
- (17) 行為の性質なき理性がマナスに存在するとき、(理性は) ブラフマンに達し、そこに帰滅するのである。
- (18) その時、触感なく、聴覚なく、食事なく、視覚なく、嗅覚なく、思惟なき最高の存在に (理性は) 入るのである。
- (19) もろもろの形相はマナスに沈み、マナスはマティ (mati) に入る¹²⁴。マティは知識に入り¹²⁵、知識は最高者に入るのである¹²⁶。
- (20) マナスは感官によって (その働きを) 成就する¹²⁷。マナスは理性を知らない。理性は未展開のものを知らない。微細なる者が¹²⁸これらを見るのである。

[198章] (=D. 205章¹²⁹, 7468-7485)

マヌは言った。

- (1) 知識は¹³⁰知識の対象¹³¹から生じると知るべし。マナスは知識をグナ (特質) とする。(マナスが) 認識器官と結びつく¹³²と、理性が活動するのである。
- (2) 行為のグナを備えた¹³³理性がマナスに存在する時、禪定・ヨーガ・三味によってブラフマンは認識される。
- (3) このグナをもつ理性はもろもろのグナの中で活動する。あたかも水が山の頂上から降下し下る¹³⁴かのように。
- (4) (理性が) マナスにおいてグナのない (nirguṇam) 禪定を、それは以前生じたものであるが¹³⁵、獲得する時、ブラフマンは認識される。試金石において被験材¹³⁶ (が認識されるか) のように。(cf. Frauwallner [1953], p. 105.25-29)

122 P. pravṛddham D. pravṛttam

123 raso N. raso vāsanātmako na nivartate so 'pi param ātmānaṃ dīṣṭvā avāptasakalakāmasya puṃso nivartate

124 P. atīgataṃ D. abhigataṃ

125 P. atīgatā D. abhigatā

126 P. tv abhigataṃ D. cābhigataṃ

127 siddhir na N. siddhir neti nakāraḥ kākākṣivad ubhayatra sambadhyate すなわち N. は「マナスは感官によって成就しない」と siddhi と関係させて解し、さらに na を次の句にもかけて「マナスは理性を知らない」と解している。

128 P. sūkṣmas D. sūkṣmam

129 D. は7460-7485の26詩節からなっている。

130 jñānam N. jñānaṃ brahma

131 jñeyam N. jñeyam ahaṃkāraḍi ghaṭāntam

132 prajñākaraṇasamyuktaṃ N. prajñākaraṇair jñānendriyaiḥ samyuktaṃ

133 karmaguṇopetā N. karmaguṇaiḥ karmotthaiḥ saṃskāraiḥ sāhitā

134 P. avatārābhiniḥsrotaṃ D. aparād abhiniḥsṛtya

135 pūrvajam N. pūrvam akhaṇḍacaitanyābhihyakteḥ prāg evāpahṛtam akhaṇḍaprakāśena tirobhūtam

136 P. nikaṣyam D. nikaṣam

- (5) 理性に隠された(?)¹³⁷マナスは感官の対象を示すものである¹³⁸。マナスは目の前にグナを見るものであり¹³⁹、グナなきものを見るもの¹⁴⁰ではない。
- (6) これらすべての門を閉じて (saṃvārya), マナスに住する者は、マナスにおいて一つのものに集中しつつ、かの最高者を獲得するのである。
- (7) グナが消滅すると(グナからなる)大元素は消滅するように、理性は感官を撰取してマナスにとどまるのである¹⁴¹。
- (8) 内部で動くものである理性が、決定という性質を備えてマナスにとどまる時、マナスとなるのである (tadā saṃpadyate manaḥ)。 (cf. Frauwallner [1953], 105.15-16)
- (9) グナをもつ者のためにグナを得たマナスが禅定をグナとする時、その時すべてのグナを捨てて、グナなきものとなるのである。 (cf. Frauwallner [1953], p. 105.18-22)
- (10) この世では、未開展のものを認識する場合、同じものを示すことはできない。足跡がなければ誰がその対象を獲得できようか。
- (11) 苦行によって、推理によって、もろもろのグナによって¹⁴²、誕生によって¹⁴³、そして天啓聖典によって、清浄な内的自我によって、かの最高者であるブラフマンを¹⁴⁴求めるべし。
- (12) グナから自由になった者は、外的にその道(グナ?)に従うのである¹⁴⁵。(その道は、)グナが存在しない故、また本性上¹⁴⁶、思惟を超えているが、知るべきものと同一である (jñeyasaṃmitam)。 (cf. Frauwallner [1953], p. 105.23-25)
- (13) グナより生じた¹⁴⁷理性は、グナなき故にブラフマンに達し、グナを伴う場合には(ブラフマンから)戻るのである。たきぎにおける火のように。
- (14) 五種の感官が自らの行為から解き放たれるように、根本原質 (prakṛti) から解き放たれた最高のブラフマンが最高者である。
- (15) このようにすべての個我 (śarīrin) は根本原質より生じ、(根本原質が)消滅すれば消滅する。そして創造に至ることはないのである¹⁴⁸。
- (16) プルシャ、根本原質、理性、特殊化したもの、感官、自我意識、そして自惚れ (abhimāna) が存在 (bhūta) と名づけられる集団である¹⁴⁹。

137 P. apahr̥taṃ buddhim D. apahr̥taṃ pūrvam N. pūrvam akhaṇḍacaitanyābhivyaakteḥ prāg evāpahr̥tam akhaṇḍaprakāśena tirobhūtam

138 P.-nidarśanam D.-nidarśkam

139 P. samakṣaṇ guṇāvekṣi D. samakṣaguṇāpekṣi

140 P. nidarśanam D. nidarśakam

141 buddhir manasī vartate N. manasy ahaṃkāre liyamānā buddhiḥ svakāryāṇīndriyāṇi gṛhītvaivaliyate Deussen: dann nimmt die Buddhi die Sinnesorgane in sich auf und verharrt im Manas

142 guṇaiḥ N. guṇaiḥ śamadamādibhiḥ

143 jātyā N. jātyucitasvadharmeṇa

144 P. tat paraṃ brahma D. paramaṃ brahma

145 bahiḥ samanuvartate N. bahir anvayenāpi samyag anuvartate anusarati

146 P. prakṛtyā ca D. prakṛtyā vā

147 P. guṇaprasāriṇī D. guṇapracārini

148 P. sargaṇ naivopayānti ca D. svargaṇ caivopayānti ca

149 P. sambhūto D. samūho

- (17) (理性など) あるものの最初の生起は¹⁵⁰根本原質 (pradhāna) より起こった。第二番目の生起は¹⁵¹すべて (aviśeṣāt) 男女一組からの顕現 (mithunavyakti¹⁵²) に限定しているのである(?)。
- (18) ダルマからは善が引き出され、アダルマからは不善が引き出される。執着をもつ者は根本原質に至り、執着を離れた者は知識をもつ者となろう (=解脱するであろう)。

[199章] (=D. 206章, 7486-7517)

マヌは言った。

- (1) これら五種 (の感官) がマナスと共に五種 (の性質) から解放されると¹⁵³, 汝は, 宝石に通された糸のように, ブラフマンを見るであろう¹⁵⁴。
- (2) 宝石の中に存在するのと同じ糸が, 真珠やサンゴや土からなるものにおいても現れる (rājate) ように,
- (3) それと同様に, 自分が自らの行為によって束縛されている者は, 牛の中に, 人の中に¹⁵⁵, 象やかもしかなどの中に, 昆虫や蝶の中に (現れるのである)。
- (4) その者はそれぞれの身体によってそれぞれの行為を為し, それぞれの身体によってそれぞれの果報を得るのである。
- (5) 一つの味をもつ地が (多くの) 植物の本質に従うように, (単一の) 理性は (多くの) 行為に従って, (それぞれの) 内的自我を認識するのである¹⁵⁶。
- (6) 所有欲 (lipsā) は知識に基づいて生じ¹⁵⁷, 渴望 (abhisandhitā) は所有欲に基づいている。行為は渴望に基づき, 果報は行為を源とするのである。
- (7) 果報は行為を本質とし, そして行為は知識の対象を本質とすると知るべし。知識の対象は知識を本質とし, 知識は有と無とを本質とする¹⁵⁸と知るべし。
- (8) もろもろの知識, 果報, 知識の対象, そしてもろもろの行為が消滅する時, その果報として¹⁵⁹知識の対象に基づいた神聖な知識が¹⁶⁰残るのである。
- (9) ヨーガを実践する (yuktāḥ) ヨーガ行者は偉大な最高の存在 (bhūta) を見る¹⁶¹。自

150 P. ekasyādyā pravṛttis D. etasyādyā pravṛttis N. etasya bhūtasāṅghasya Arjunamiśra : ekasya mahadākhyasya

151 dvitīyā N. dvitīyā pravṛttis tu mithunād abhivyaktiṃ niyacchati niyamayati na punar yādṛcchiki sṣṭir ity arthaḥ

152 N. mithunād bijāṅkuranyāyena vyaktim abhivyaktim Deussen : die gegenseitige Paarung

153 P. yadā te pañcabhiḥ pañca vimuktā D. yadā taiḥ pañcabhiḥ pañca yuktāni

154 P. drakṣyase D. drakṣyate

155 P. goṣu manuṣyeṣu D. go'svamanuṣyeṣu

156 karmānugā buddhir antarātmānudarśiṇī N. antarātmā anudarśiṇī sāksī yasyāḥ sā tathā sāksī-prakāśyāpi prākarmānusāriṇy eva buddhir bhavatiṭy arthaḥ

157 P. jñānapūrvodbhavā D. jñānapūrvā bhavel

158 sadasadātmakā N. sadasadātmakā 'cijjaḍarūpaḥ Deussen : was ist unt nicht ist

159 P. tatphalaṃ D. yatphalaṃ

160 P. divyaṃ jñānaṃ D. vidyājñānaṃ N. divyaṃ jñānaṃ iti pāṭhe divi hārdākāśakhye kāraṇe brahmaṇi bhavaṃ divyaṃ Arjunamiśra : divi bhavaṃ divyaṃ ananubhūtam

161 P. yuktāḥ paśyanti yoginaḥ D. yat prapaśyanti

己に住しグナを認める¹⁶²無知なる者はそれを見ることはない。

- (10) この世界では、地の形 (rūpa) よりも水の形の方が大きい。水よりも火が大きく、火よりも風が大きい。
- (11) そして風よりも虚空が大きく、それよりもマナスが上位である。マナスよりも理性が大きく、理性よりも時 (kāla) が大きい、と伝えられている。
- (12) 時よりも聖なるヴィシュヌが (大きく)、それ (ヴィシュヌ) にこの世の一切は属している。その神には始まりもなく中間もなく終わりもない。
- (13) 始まりもなく中間もなく終わりもない故に、彼は不変であり、すべての苦を超えている。なぜなら苦には終わりがあるとされている故。
- (14) それは最高のブラフマンであると言われ、それは最高の住居であると伝えられている¹⁶³。(人は) そこに至った後、時の対象から¹⁶⁴解き放たれ、解脱に住する。
- (15) (人々は) これらのグナとともに現れる (prakāśante)。(ブラフマンは) グナなき故に、それよりすぐれている。(行為の) 停止を特徴とするダルマは¹⁶⁵無限であると¹⁶⁶考えられる。
- (16) 讃歌・祭文・旋律は身体に依存している。舌の先において現れるそれらは、努力によって達成されるものであり、消滅するものである。
- (17) ブラフマンはこのように身体を拠り所として生じるとは考えられない。ブラフマンは努力によって達成されるものではなく、始まりもなく中間もなく終わりもない。
- (18) 讃歌には始まりがある。同様に旋律にも祭文にも始まりがある、とされている。始まりがあるものには終わりがあることが経験的に知られる。そしてブラフマンには¹⁶⁷初まりはないと伝えられているのである。
- (19) 始まりがない故、終わりがない故、それは終わりなくまた不変である。そして不変である故に対立物はない。対立する者がいない故に¹⁶⁸、その故に最高者である。
- (20) 不可見である故、手段がない故、そして行為に対する願望の故に、人々はその最高者に¹⁶⁹至る方法を用いて (最高者を) 見ることをしないのである。
- (21) (人は) 対象に対する執着の故に、そして (ヨーガ行者は対象において) 永遠なるものを見る故に¹⁷⁰、マナスによって他のものを¹⁷¹望み、最高者に至らないのである。(cf. MBh. XII. 197.7)

162 guṇabuddhayaḥ N. guṇeṣu viśayeṣu buddhir yeṣām

163 P. smṛtam D. padam

164 kālavīṣayād N. kālavīṣayād anityād duḥkhātmakāt

165 nivṛttīlakṣaṇo dharmas N. nivṛttīlakṣaṇaḥ śamadamoparamādirūpo dharmo nirvikalpakaḥ

166 ānantyāya N. ānantyāya mokṣāya

167 P. na cādir brahmaṇaḥ D. na tv ādir brahmaṇaḥ

168 P. nirdvandvaṃ D. nirduḥkhaṃ

169 P. tat param D. tat padam

170 śāsvatasya ca darśanāt N. viśayās ca hārdākāśākyabrahmalokagatāḥ śāsvatāḥ madhumatyāṃ yogabhūmau sthitasya yoginaḥ saṃkalpamātropanatāḥ

171 anyad N. anyad yogaiśvāryasukham

- (22) この世でグナ（物質的性質）と¹⁷²（人々が）見るものを、低き人々は望むのである。グナを求める人々は最高者を求めているのではない。（最高者は）グナなきものであるから。
- (23) 低いグナと結びついた人は、身体の一部となったグナと共に(?)¹⁷³、どうしてこれらのもろもろのグナを¹⁷⁴、それは推理によって認識されるべきものであるが、知ることができようか。
- (24) 我々は（それを）微細なマナスによって知る。（それは）言葉によって表現することはできない。なぜならマナスはマナスによって捉えられ、視覚は（darśanam）視覚によって捉えられるからである。
- (25) 知識によって理性を汚れなきものにし、そして理性によってマナスを（汚れなきものにし）、マナスによって感官の集団を（汚れなきものにして）、（人は）無限を¹⁷⁵獲得するのである。
- (26) 理性が損なわれ、マナスによって（望みが）成就せず、希望を失った者はグナ性へと赴く¹⁷⁶。彼は迷って¹⁷⁷、風が薪にある火を消すように、最高者を捨て去るのである。
- (27) 彼らの（teṣām）マナスは、理性の高低によって、グナを受け取り(?)¹⁷⁸、そして（グナから）離れるのを常とする。このような仕方（vidhi）で振る舞う者は、グナを受け取らない時¹⁷⁹、ブラフマンの身体に至るのである。
- (28) 未開展の本質をもち¹⁸⁰未開展の行為をもつプルシャは終わりの時に¹⁸¹（再び）未開展となる。この（プルシャの）行為の姿は¹⁸²、成長しそして衰退する感官と共に（輪廻の中に）存在する¹⁸³。
- (29) すべての感官と結合したこの身体は死後¹⁸⁴五元素を抛り所とするものとなろう。最高にして不変のものに去られたそれ（身体）は、能力なき故に、この世での行為によって（ブラフマンに？）赴くことはない。
- (30) 人はこの地の終わりを見ることはない。しかし、この地の終わりは存在する、と知る

172 guṇān N. guṇān viṣayān Deussen : Guṇa's [der Prakṛiti]

173 P. guṇair avayavair saha D. guṇair avayavaiḥ param Deussen : durch die Guṇa's als seine Glieder

174 P. guṇān imān D. parān guṇān

175 P. anantaḥ D. akṣaraḥ

176 P. nirāśir guṇatām upaiti D. nirāśiṣaṃ nirguṇam abhyupaiti

177 P. vilobhyamānā D. viloḍyamānā

178 guṇādāne N. guṇeti / viṣayaṇām ādāne ābhimukhyane khaṇḍane ātmani pravilāpane kṛte sati
Deussen : Wenn die Guṇa's zertrümmert

179 P. guṇādāne D. guṇāpāye

180 avyaktātmā N. avyakteti vānmanasā gocaratvoktyā mana ādivat pratikatvādikam nirasyate /
ātmeti vyāpakapratyakcaitanyarūpatvoktyākīṭabhṅgavad yatnāntarasyalabhyatvam ucyate /

181 antakāle N. antakāle sūptipralayamokṣāṇām anyatamakāle vāvyakta evāto 'sya vybktatvam
antalāle 'vagantavyamṛṣaiḥ

182 P. karmarūpaḥ D. 'kāmarūpaḥ

183 cendriyair vardhamānair glāyadbhir vā N. vāśabda upamārthe glāyann ivāvartate lokadvaye saṃ-
carati ghaṭākāśavat ārṣo vibhaktivyatyaḥ Arjunamiśra : glāyadibhiḥ anapekṣitaviṣayaśaṅgāt /
vardhamānaiś cābhimataviṣayaśaṅgāt

184 P. dehaḥ prāptaḥ D. dehaṃ prāptaḥ

べし。風が海に浮かぶ船を導くように、(もろもろの行為は) 惑っている者を¹⁸⁵最高者へと導くのである¹⁸⁶。

- (31) 太陽はグナを示した後にグナなきものとなり光の輪は消えるように¹⁸⁷、聖者 (muni) は、この世での特殊性がなくなると、グナなき不変のブラフマンに入るのである。
- (32) 善行の人々にとって¹⁸⁸ (輪廻に) 戻ることなき¹⁸⁹最高の境地とは、自ら存し、誕生と死の基盤であり¹⁹⁰、不変のものである。その永遠なる不変不死の境地を¹⁹¹思量した後¹⁹²、(人々は) 寂靜なる不死性を¹⁹³得るのである。

(1995年8月28日 受理)

185 P. vilobhyamāṇaṃ D. viloḍyamāṇaṃ

186 「導く (nayanti)」の主語になる複数主格の語はこの詩節にはない。N. は karmāṇy を nayanti の主語としている。 Deussen: sie [wohl: die Werke]

187 P. vyapagataraśmimaṇḍalaḥ D. apagataraśmimaṇḍalaḥ この比喩について N. は次のように説明している。 yathā sūryaraśmīnām udayāstamyāv evaṃ caitanyabhāsām api sta ity āha divākara iti / guṇaṃ rāśmimaṇḍale na jagadvyāpītvam evaṃ jīvaḥ satyāṃ cittasuddhau jñānodaye satī rātriṃ-
divavat saṃsāralayodayau paśyatīty arthaḥ /

188 P. sukṛtīmatāṃ D. sukṛtīvatāṃ

189 P. anāgatiṃ D. anāgataṃ

190 prabhavanidhānam N. prabhavaty asmān nidhiyate liyate 'smin kāryajātam iti prabhava-
nidhānam

191 P. padaṃ D. dhruvaṃ

192 P. vicārya D. nicārya

193 P. taṃ śamam amṛtatvam D. tat param amṛtatvam